

「ワクチンを打つことができれば、こんなことはならなかったのに……」
埼玉県ふじみ野市の主婦 吉田里江さん(30)は、今も悔しい思いをぬぐい去ることができない。

2003年8月、生後3か月だった二男の幸太郎君に38度近い熱が出た。近所の開業医の診断は「かぜ」。3日間受診し、薬を飲んでも熱は下がらず、ぐったりしていたため、紹介された総合病院を受診した。

医療ルネサンス

No.3837

背骨から髄液を抜いて検査した結果、診断は髄膜炎。それも重症だという。

髄膜炎とは、脳や脊髄を覆う髄膜に細菌やウイルスが感染し、炎症を起こす病気。頭痛や発熱、嘔吐、ひきつけなどの症状が表れる。

幸太郎君の場合は、「Hib(ヒブ)」「ロタウイルス」

髄膜炎ワクチン 上

父親に抱っこされ、三つ年上の兄と遊ぶ幸太郎君。右は母親の里江さん(埼玉県の自宅で)



先進国で唯一 未承認

Hib(ヒブ=インフルエンザ菌b型) 肺炎や敗血症など様々な感染症の原因となる細菌。冬に流行するインフルエンザを引き起こすウイルスとは全く別。100年ほど前、インフルエンザの患者にこの菌が見つかったことから命名された。

「……」と繰り返す。やがて、不安は的中した。1歳になっても「はいはい」ができない。言葉も、単語が一向にしゃべれない。2歳5か月になった昨

ショックを受け、涙があふれた。「この子の将来はどうなるの?」と不安は募る。
吉田さんは昨年春から看護専門学校に通っているが、Hibの感染を予防するワクチンがあることを授業で初めて知り、驚いた。Hibワクチンは世界各国で使われ、髄膜炎の発症が激減している。ところが先進国では日本だけ、いまだに薬が国に承認されておらず、予防接種が受けられない——というのだ。

「後遺症で苦しむ家族がこれ以上増えないように、早くワクチンが使えるようになってほしい」。それが、せめてもの願いだ。

わが国では、Hib髄膜炎の怖さとワクチンの重要性が、あまりに軽視されてきたのではないかと、幸太郎君のありのままの姿を受け入れるしかない。

ご意見・情報を 〒100-8055 読売新聞東京本社医療情報部 FAX03(3217)8985 iryou@yomiuri.comへ

子育てに関する若いパパが増えているが、「職場では話題にしない」「女性向けの雑誌などは抵抗がある」と、手がかりに悩むことが少なくないようだ。でも、ここにきて育児雑誌にも、父親向けのノウハウや助言を集めた付録の冊子にまとめたものが増えている。パパたちも気後れせずにとってみてはどうか。

千葉県習志野市に住む会社員の男性(38)は、子どもが4年前に生まれたころから育児雑誌を読むようになったが、書店では女性誌の売り場に置いてあるため、購入するのはいつも妻が、自分で買ったことはないという。

「それでも、立ち会い出産をすべきか、妻の体が妊娠でどう変わるのかなど、わからないことばかりだったので参考になった。夫の

立場で書かれた最近の雑誌は、さらにわかりやすい」と話す。
育児雑誌はもともと女性向けに作られていたが、

支えあって 子育て



最近父親を意識した特集を組むなどの動きが広がっている。

例えば、妊婦向けの月刊誌「たまごクラブ」(ベネッセコーポレーション)は、2003年7月からこれまで5回、別冊付録として「MEN'S たまごクラブ」

くらし 家庭

く浴を行う時の工夫や心構え、経験者の失敗談、妊婦の症状と対処法といった具体的な情報が多い。

埼玉県二芳町に住む会社員の久保田健介さん(28)は、生後5か月の長男が生まれる前から、この冊子やインターネットの育児情報などで勉強した。「母親だけが育児していた昔といまの時代は違う。ほかの家庭ではどうしているのか、自分は何をすればいいのかわからない」と思いました。

こどもの詩

カタカナ ひらがなで書くものをカタカナで書くとおもしろい
こくばんを コクバンくすりの名前みたい
なわとびがナワトビ トビオオのなかまかな
(横浜市・相武山小3年)

ひらがなとカタカナでは、ことばの表情はガラッと変わる。文字はことばの表情なんだ。(長田 弘)

頼れる! パパになる 雑誌

妊婦への対処、おむつ替え

「積極参加」アドバイス

を発行、「もつすべ」パパになる人へのアドバイスマガジン」という副題をつけている。

昨年未発行の第5号は、65歳。写真やイラストを多用し、「妊娠生活はこう乗り切る」「先輩パパに育児を学ぶ」「男のお産道場」などの企画が組まれている。おむつ替えや、も

指摘する。

「たまごクラブ」編集長の中西和代さんは「以前から父親向けの情報の特集などで組むと好評だったが、『夫にポンと手渡せるよう独立した冊子にしてほしい』という声が多かった。最近では、夫の方がおむつ替えが上手という話を読者から聞きます」と話す。

編集長の小山敦司さんは「職住接近だった時代の父親は育児に結構熱心だった。高度成長期の『企業戦士』とは違って、いまの若い父たちは子育てに関心が高いが、母親の補助役にとどまり、自分はこの子どもを育てたいというイメージを持っていない」と話している。

* * *



「世界でいちばんママが好き。」(文・武香織、絵・小林治子、河出書房新社、税別1000円)
お金がないと嘆くママの財布にそっと自分のお年玉を入れてくれた息子、ママのひざに座りたくてけんかする姉妹は、「ママのおひざの形をした



父親向けの育児情報を活用している久保田健介さん(左)は、雑誌の体験企画で先輩パパの家を訪れ、子どもの誕生前にオムツ替えに挑戦した

を發行、「もつすべ」パパになる人へのアドバイスマガジン」という副題をつけている。

指摘する。

編集長の小山敦司さんは「職住接近だった時代の父親は育児に結構熱心だった。高度成長期の『企業戦士』とは違って、いまの若い父たちは子育てに関心が高いが、母親の補助役にとどまり、自分はこの子どもを育てたいというイメージを持っていない」と話している。

「世界でいちばんママが好き。」(文・武香織、絵・小林治子、河出書房新社、税別1000円)
お金がないと嘆くママの財布にそっと自分のお年玉を入れてくれた息子、ママのひざに座りたくてけんかする姉妹は、「ママのおひざの形をした